

HELL TAXI

RPM

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元テロリストのタクシードライバーが色々する話。

ミスファイア

目

次

ミスファアイア

「ありがとうございます、またご利用下さい。」

客を降ろして一息つくタクシードライバーの男。
その名は武六むろく賢人けんと、しかしこれは偽名である。

彼は中東のある国で産まれ幼少の頃から、
パリ・ダカールラリーを間近に見て育つた。

そして自らもレーシングドライバーに憧れを抱くが、
国の情勢が不安定でありテロ行為に手を染めていた。

そんな中戦場で出会った、

日本人の傭兵の伝手で日本へと渡る。

仕事でもハンドルを握つて いたい といふ想いと、
ターマックの練習を兼ねて個人タクシーをやつて いる。

日本語に関しては元々独学で勉強しており、

難しい漢字の読み書き以外なら問題ない程度には習得していた。

というのも彼は元々日本への憧れが強かつた。

優秀なクルマを数多く輩出している日本、
ラリー界でもその活躍は有名である。

と、そこへ無線が入つた。

『ハロー、賢ちゃん。今暇?』

無線の相手は彼を日本に連れて來た傭兵の男。
日本に來てからは私立探偵をやつて いる。

『ちょうど一人運んだ所だ、何かあつた?』

『んじや仕事締めて事務所に来てくれ、新しい以来だ。』
『了解。』

フロントウインドウの表示を「回送」にし、
今日の売り上げなどをまとめて締める。

個人タクシーに改造されたスポーツワゴン、
トヨタカルディナG T—FOUR。

見た目は普通のカルディナだが、

WRCで活躍したセリカと同じエンジン、
駆動系を持つ限定グレードである。

傭兵の男の知り合いの店でチューニングされ、
パワーは約400馬力。

さらにアンチラグシステムも作動出来る。
タクシーであるため快適装備が多く重量はかさむが、
緊急時に街をかつ飛びには充分なスペックだろう。

(急ぎとは言われてないけど一応な)

タクシーの仕事の際はパワーリミッターをONにし、マフラーの音を抑えて快適性を重視している。

抑えていたパワー解放し、
アンチラグシステムもONにする。

パン！　パンパン！

(作動確認OK、行くぞ)

見た目とは似つかわしくない重低音と、

アンチラグ特有の銃声のようなバックファイヤーを轟かせながら探偵事務所に向かう。

・・・・・・・・・・・・・

倉池探偵事務所。

「よう、飛ばして來たな。」

事務所に到着すると、

元傭兵の探偵倉池瀬南くらちせなとツナギの男が居た。

「あれ？ もしかして依頼主つて？」

「そう、俺だ。」

カルデイナの手配、及びチユーニングをしてくれた、
ツナギの男稀井豪まれいごうからの依頼だつた。

豪はチユーナーでもあるが車の解体工場を営んでいる。
廃車から生きている部分同士を組み合わせることで、
安価に高性能なマシンを作る狙いがある。

しかし最近、近所で怪しい外国人集団がうろついているとの事だつた。

「まあまだ実害は出てないけど、

もし窃盗団だつたらと思つてな。」

「アンタには世話になつてゐるからな、

とりあえず周辺の見回りでもしておくか?」

「そうだな、それで頼む。」

「外国人窃盗団は密輸した武器を持つてゐるつて噂もあるし、俺達が適任だろう。」

武器は瀬南が傭兵時代の伝手で手配し、

賢人はタクシーの仕事の合間に見回りに来る。

という話にまとまつた。